

12章：歴史の教授・学習に関するポールのペンからの教訓

Lessons on Teaching and Learning in History from Paul's Pen

担当：池尻良平（東京大学大学院情報学環）

ikejiri@iii.u-tokyo.ac.jp

■著者情報

著者名：Gaea Leinhardt

研究関心：教科（数学、地理、歴史）の教授と学習に関する量的・質的な教室の研究

経歴：the Learning Research and Development Center の senior scientist であり、ピッツバーグ大学の教育学の教授。ピッツバーグ大学の Cognitive Studies in the School of Education のプログラム委員長も務めている。主な編著に” Teaching and Learning in History”がある。論文の被引用数も非常に多い（下記参照）。

<https://scholar.google.com/citations?user=Fm2u0XsAAAAJ&hl=en>



■重要な用語

- ・ a sense of history 「歴史意識」
- ・ semiformal 「セミフォーマル」（※フォーマルとインフォーマルの間）
- ・ Document Based Question (DBQ) 「文書ベースの質問」
- ・ the Organizational Pattern 「組織化のパターン」
- ・ Document Use 「文書使用」
- ・ connector 「接続語」
- ・ citational system 「引用システム」

■議題

- ①DBQ はその構成自体が教育的だが、資料の選別基準はどのようにするのが良いのか？
- ②「組織化のパターン」は「Shemilt のナラティブの枠組みの発達」と比べるとやや区別が粗い気がするが、テストで用いるのならどのレベルが妥当か？
- ③引用システムで「文書の横に複数のコメントをつける」ことの価値を記述したのは貴重。「セミフォーマル」な活動を捉えることで、よりプロセス上での重要な行動や認知が発見できるかもしれないが、どのようなシーンで見られそうか？

概要：

ポールという高校生が授業期間中に見せた歴史を書くことの発達に注目し、エッセーがどのように発達して行ったのかを、「組織化のパターン」や「文書使用」の特徴に注目しながら分析し、その理由を探っている。

■ (イントロ) (pp.223-225)

①この研究で問いたいこと

「とても効果的な歴史教育の実践の特徴は何か」

「そのような実践から生まれる歴史学習の特徴は何か」

②研究プログラムの背後にあるコアの疑問

「歴史の教授や学習が提供する機会として本質的なものは何か？」

③生徒は学校の外で歴史を学んでいる（親から、テレビから、映画から、博物館から）

④学習者も教師も歴史意識を教室に持ち込んでいる

・彼らの歴史意識や歴史理解とは何か、どのようにそれらを発達させているのか

→これらに答えることで学問としての歴史意識、ポップカルチャーとしての歴史意識、ローカルで個人的な歴史意識の間の関連性をより感じられるようになるだろう

■歴史教授・歴史学習のケーススタディ (pp.226-228)

①Sterling という優秀な教師の授業（1学期と2学期）の

A.P. アメリカ史と A.P. 近代ヨーロッパ史の2コースが対象

②ビデオテープや音声テープ、生徒の成果物やノート、教師へのインタビュー等で2年間のデータを収集し、ポールという特殊な生徒の追跡データも取得

→歴史的な考えをうまく書くことと、歴史的に洗練された方法で話すことを徐々に学習した

→最初は A.P.クラスに入る資格がなく、授業中の間違っただ口頭での話しも耳障りだった

→歴史的な曖昧さに耐えるレベルには到達しなかったが、弁護士のように証拠を使い、

議論のサポートをできるようになっていたため、分析対象にした

③授業内のセミフォーマルな話し活動（先生や生徒自身の疑問に対するよく考えられた返答）や授業内外のセミフォーマルな書き活動のデータも利用

④「セミフォーマルな状況」を研究として扱う利点

→頻繁に自然に発生する出来事である点、生徒が何を学んでいるかを明らかにできる点、

ほとんどの高校や大学レベルのクラスでは各生徒に最低3~5回はこの状況が発生する点

⑤ポールが書くことをどう学び、歴史的な考えや事実について話すコンピテンシーを

どう発達させたのかを分析していく

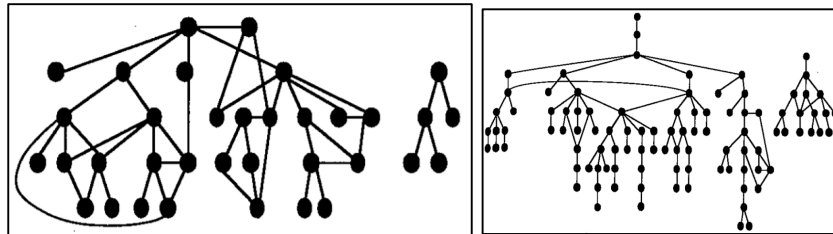
■書かれたものの分析：ポールのペン（pp.228-242）

※紙幅の都合上、書かれたものの分析だけ紹介すると説明している

- ①ポールは1セメスターの間に4つエッセーを書くよう言われており、そのうち3つは
A.P.テストの過去問、特に Document Based Question（DBQ）が使われている
- ②標準的なDBQのフォーマット
 - ・8個～11個の文書資料と一緒に一般的な質問が提示される
 - ・文書資料は教科書の要約ではなく、部分的に内容が重なっているものである
 - ・文書資料は時代とフォーカスする問題がモザイク上になっている
 - ・重要な人物の1～2のスピーチ、風刺画やチャートや地図のような1～2の図表、
新聞記事やインタビューなどが含まれる
 - ・DBQは、異なる資料を操作したり、背景知識を使ったり、文書中の複数のレイヤーを通して
著者、日付、立場、批判点などの皮をむいたりしながら、生徒の知識を変形させることを
要求する問題である
 - ・文書中の証拠や関連する知識を用いて短いエッセーを書かせる
- ③DBQで発達するものには「歴史意識」の他に「組織化のパターン」と「文書使用」がある
- ④組織化のパターンには、下に行くほど高度なものとして以下の3つがある
 - リスト：エッセーの意味を変更することなく異なる方法でたくさん列挙されている状態
 - 明示化されたリスト：数字やカテゴリーによって組織化されている状態
 - 因果的なリスト：エッセーを構成する要素が因果的に一貫して組織化されている状態
- ⑤組織化のパターン分析にはエッセー内のユニット間における「接続語」のタイプも含まれる
 - 例：リスト（そして）、標本（例えば）、同等（同じように）、プレースホルダー（初めに）、
因果（そのため）、限定（しかしながら）etc
- ⑥ポールが10月に書いたエッセーと1月に書いたエッセーを比較する

10月時点でのポールのDBQエッセー（pp.231-236）

- ①質問：1781年～1789年のアメリカの連合規約は効果的な政府を提供したのか評価せよ
- ②文書資料の概要：8つの様々な形態の資料
- ③ポールが採用した歴史的な立場
 - ポールはDBQを正しい答えを述べるものと捉え、疑うことなく強く否定する立場を取った
 - 質問に答えることと、エッセーを統合していくことは別々の作業になっていた
- ④エッセー全体の模式図（10パラグラフ、766文字）
 - 左のまとまりの左部分が外交政策、左のまとまりの右部分が内政の箇所
 - 内政のパラグラフは彼の外交における問題の解釈をサポートするものとして書かれており、
コアのアイデアが2つあるという書き方ではなかった



ポールのエッセーの模式図（左が10月、右が1月）

- ⑤「組織化のパターン」と「文書使用」の特徴
→全体を通して、明示化されたリストの組織化のパターン（因果は少し。カテゴリーはなし）
→文書を統合したり、変形させたりはしていなかった

- ⑥結論のパラグラフの深さの検証
→規約の弱さを標準的なリストで説明して因果も使っているが未分析のユニットは言及なし

1月時点でのポールのDBQエッセー (pp.236-242)

- ①質問：1880～1900年の農民が不平を言っていた理由を説明し、それが妥当かを評価せよ

- ②文書資料の概要：8つの様々な形態の資料

- ③ポールが採用した歴史的な立場：

- 質問を再記述し、時間軸の中に質問を位置付けた上で、3つの理由を述べた
→結論部分では、文書の証拠を用いて農民の不平は妥当ではないと評価をしており、
文書資料と自分の知識を統合させていた（これは10月のエッセーとは異なる点）
→ただし、文書の著者やなぜそれが重要かの確認まではできていなかった

- ④エッセー全体の模式図（9パラグラフ、1346文字）

- よりノードが増え（詳細になり）、全体のバランスも良く、深くなっている

- ⑤「組織化のパターン」と「文書使用」の特徴

- 因果的なリストとまでは言えず、明示化されたリストだった
→ただし、エッセー中の因果的な接続語はより多く、表現も豊かになっていた
→さらに、彼の引用システムの中で文書の証拠を合体させることを学んでいた
1) 文書の隣に複数のコメントを書くようになった（＝様々な議論の際に使う下準備）
2) 文書それ自体を何度も使い、1つのポイントにも複数使うようになった

- ⑥結論のパラグラフの深さの検証

- 結論を因果的に展開し、文書資料もスムーズに結論に組み込んでいる

- ⑦ポールが上達した理由＝授業中の教師の話す活動を真似し、自分で返答して学んでいたから

■研究に向けた質問と場所の拡張 (pp.242-244)

- ①本教授法は人々の自身と自身の文脈への探索と真実と空想の識別ツールとして役立つだろう